

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



稲田の西念寺

3月

March 2019

No. 16

親鸞聖人 ゆかりの地を訪ねて

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、その後関東でのご教化を経て九十歳でお亡くなりになりました。そんな聖人を想う人々が、その実像を追い求め史実を探し、史実の空白のなかから伝承が生まれ、そこから新たな旧跡が現れてきました。ここでは、そんな聖人のゆかりの地を訪ねていきたいと思ひます。

【立教開宗の地 稲田の西念寺】

(茨城県笠間市稲田四六九)

浄土真宗別格本山。別名「稲田御坊」と呼ばれ、親鸞聖人が常陸国稲田の領主であった稲田九郎頼重の招きに応じて、妻子ともどもこの地に草庵を結んだのが始まりとされています。頼重も頼重房教養としてお弟子となり、聖人を支え続けました。

聖人はこの地に妻の恵信尼公とともに二十年間在住され、関東地方各地や東北地方にまで足を運ばれ南無阿弥陀仏のみ教えを人々に伝えたのでした。また聖人はこの地で、『顕浄土真実教行証文類(教行信証)』の著述を始められたと言われています。それは、師法然聖人の説き示された南無阿弥陀仏のみ教えのいわれを、伝統宗派が依りどころとする様々な經典のみ教えを元に体系化したものです。また、『教行信証』には私たちが日々お勤めさせていただいている

「正信偈」も示される根本聖典です。そのようなことから、この地は浄土真宗において立教開宗の聖地となっています。

頼重は聖人の帰洛後この草庵の跡地に寺を開創し、それが現在の西念寺となっています。

付近には親鸞聖人の頂骨を納めたとされる「親鸞聖人ご頂骨堂」があり、聖人が稲田を離れるときに草庵を振り返られたという「見返り橋」、天然記念物の「お葉つき银杏」などがあります。



親鸞聖人ご遺骨の一部を納めた
御頂骨堂



【 洒 心 】

今からちようど半年ほど前になるか、昨年の漸く梅雨が明けてこれから本格的な夏の暑さに向かわんとする頃であった。その日は他の寺族はみな出掛けている愚生一人居ったのであるが、昼を少し過ぎた頃であったかインターホンが鳴ったので玄關に出てみると、四十前後の見知らぬ男性が立っている。愚生が「何か御用ですか」と尋ねると、その男性が云うには「実は思うところがあつて此の春から全国のお寺を一ヶ寺残らずお参りして廻ろうと思ひ立ち、自転車で旅をしていて、今月は神奈川県のお寺を廻つており、今日、此方のお寺をお参りさせていただいた次第である」との旨を話された。更に続けて話されるには「もう四ヶ月もお寺参りの旅を続けており、実は少しばかりの

貯えも底を尽き、今後どうしてお参りを続けていったらよいのかと思案している。そこで大変厚かましいとは思ふが、幾らでも結構なのでカンパ願えなにか」と云われる。そこで愚生は「先程から少し気になつていたのだが、如何なるご意思で寺参りをされているのか分らないが、何れにせよ全国の寺を参拝しようとの志は大変殊勝な事とは思ふけれども、失礼ながらお顔が大分赤みを帯び大変酒臭く感じる。昼間から酒を呑みながら寺参りをされているのか」と尋ねると、その人は大きく手を振りながら「とんでもない、酒など一滴も呑んでいない」と強く否定し「若し私の身体が酒臭いのであれば、それは此の一ヶ月ほど風呂に入つていないための体臭で、赤い顔は日中自転車に乗つてお寺参りをしているので、日焼けしているのだ」とのことであった。愚生の勝手な思ひ込みで大変失礼なことを云つてしまい、謝つたことを今更の如く思ひ出される。

人の身体は何日も風呂に入らぬと、

特に汗ばむ夏ならばきつい体臭を放つようになる。しかし、体臭ならば風呂に入つて洗い流せば済むことかもしれない。多くの人は身体の汚れは気になつて、毎日手を洗い顔を洗つているが、何故か心の汚れを問題にする人は少ないように思われる。

仏教では「身心一如」と言う。身と心は一体。人間として身を清潔に保つことも大事なれど、更に大事なのは心の洗浄である。ところが、身体の洗濯を忘れぬ人が心の汚れは全く気にしない。生まれ持つて此の方、心の洗浄など考えたこともないと云う事であるなら、一ヶ月もお風呂に入らなければ身体は悪臭を放つとすれば、その心からは如何程の悪臭を廻りに放つているのか。身体の悪臭はたいした問題ではないが、心の悪臭は自身のみならず廻りに如何程の迷惑を生じせしめるか計り知れない。

表題の「洒心さいしん」とは穢れた心を洗い清めるの意。吾人は手が汚れていると気付けば手を洗い、顔が汚れていると

思えば顔を洗う。汚れに気付くからこそ洗い清めようとするのである。さすれば、心の穢れを知ると云うことがなければ「洒心」と云う用はたらきも生じないのでが道理である。

『涅槃経』の中に「慙さんなき者は人とせず、名づけて畜生とす」とあり、またた孔子の孫で亜聖と称された孟子の言葉に「羞悪の心無きは人に非ざるなり」との教えが見られる。先の慙愧は人に恥じ天に恥じるの意。また羞悪は自らの悪を恥じるの意であれば、恥を知らざる者は人間とは云えない。つまりは「恥を知る者が人間である」と云うことになるか。言い換えれば、「心ならずも人間として恥ずべき行為をしてしまふ存在が人間である」と云うことであろうか。

聖人と称された大人物の孔子程の方でも「七十にして心の欲する所に従へども矩のりを踰こえず」と曰われている。つまりは人間を完成させるまでに七十年掛かったと云うことであろうか。さすれば愚生が如き悪業煩惱に充ちた身は、

生涯妄念妄想を懐きつつ虚仮不実の邪道を何処迄歩み続けるのか。寂しくもあり、また悲しくもあり、心傷む限りである。

平安期の高德の僧惠信和尚は、『横川法語』の中で「妄念もとより凡夫の地体なり。妄念のほか別に心は無きなり」と仰せられてあり、また祖師聖人は『一念多念文意』に於いて「凡夫といふは無明煩惱われらが身にみちみちてく乃至臨終の一念に至るまで止まらず消えず絶えず」と示されてある。親鸞聖人や惠信和尚のような高德の僧が妄念妄執は最期迄尽きるものではないと仰せられていられるのだから、況してや我々凡人は怒り、欲、妬みやらを懐くことに慙愧や羞悪を懐くなど無用のことなどなどとして、そこに胡座あぐらをかくなら、それこそ畏ろしいことで、人間放棄の道に外ならない。祖師聖人は御本典信巻末に於いて「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、く乃至く恥ず可し、傷む可し」と述懐されておられる。

吾人は誰に教わるでもないのに、貪欲瞋恚愚痴と云った煩惱が抑えようとしても尽きることなく無尽蔵に湧き起こってくる。意識して起こすものであるなら抑えようもあるであろうが、起こってくるものともなれば、それを起こさぬようにすることは難中の難と云うものである。しかし我等罪惡深重煩惱熾盛の凡夫なれども、穢れた罪深き身を恥じ、悲しみ傷む心がなくてはならない。ここにこそ迷妄の凡夫が救われる一縷の道があるのでないか。煩惱具足の身を恥じ悲しみ傷む心が全くないとするならば、罪深き身の救われる道は鎖されてしまふ。

人間は身心の汚穢を取り除き、洗い流さんとする数多の方法が見られるが、今年の元旦に当寺に初参に來られた〇氏が帰り際に「これから相模川で催される寒中水泳に参加する」とのことであつた。また全国各地の神社仏閣等で見られる寒中に凍て付くような冷水を頭からかぶる「水垢離」と云われる行事も、身心の穢れを洗い清めんとする

のであるが、取り去り難い身心の汚穢を洗い清めんとする行為は、決して否定されるべき事ではないが、結果としては自らを瞞着まんちやくすると云うか、気休めのように思われるのだが。

人間の体を「百骸九竅」と表現することがある。風呂に入り体を洗えば清浄になったように思われるが、しかし洗ってすぐにも九つの穴より不浄なる汚穢が止めどなく流れ出るのが人間の身体ではないか。「此の身九つの穴より不浄の流れ出づること極まりなきに似たり。皮もて覆い姿清げなれど夫はかざりにて、みにくきを隠さずが如し」と聞かされると、人間の体は汚穢物を貯蔵した皮袋に似たりとも思われてくる。身心を洗い清めると云っても、身さえ件の如くなれば、ましてや容として捉えようのない心に於いておやと思われるが、表題の「洒心」、心を洗い清めるといっても、身を洗うが如く心を取り出して浄水で洗い流すことなど出来様もないことである。

恵信和尚は「妄念もとより凡夫の地

体なり。妄念のほかは別に心は無きなり」と断ぜられ、親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫」と仰せられたれば、冷水を被ることも出来ない、煩惱を断ち切ることも出来ぬ我等凡夫の為し得る道は、ただただ真の仏法を伝える善知識の説法を聴聞する以外にない。善知識の説法はそのまま仏の説法なるが故。

『歎異抄』の第二条に「親鸞におきてはただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せを被りて、信ずるほかに別の子細なきなり」とのお言葉が見られる。手の汚れは直接自分の眼で見られるが、顔の汚れは鏡を通してなければ気付かない。ならば己の心は如何にしたら見ることが出来るのか。内観と云った自分で自分の内面を観察したとしても、それは皮相な観察でしかない。真の自己の相は鏡を通して自身の顔を見るが如く、心の鏡となるのが仏のみ教である。

一切衆生を知り尽くされた仏は「一切衆生穢惡汚染にして清浄の心無く虚仮諂偽てんぎにして真実の心無し」とお説き

くだされた。仏のみ教を通して底知れぬ我が身の罪業深き真の相に気付かされ、「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なるゆへに、虚仮の行とぞなづけたる」（『悲嘆述懐和讃』）との自覚に立たされたとき、自力を以って何が出来ると云うのか。汚れた雑巾で汚れた処を拭かんとするが如く、火を以って火を消さんとする様なものである。罪悪深重煩惱熾盛なる救われ難い我等凡夫の性を知り尽くされた仏が、憐れみ給いて濁世にさ迷う一切衆生の助かる道をひらかんと誓願を建てられ、その誓願成就の大道こそが「弥陀の誓願を信じ念仏申せ」の一道である。ただ自力の雑行を捨てて。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とお示しくださる善知識のお言葉を聴聞し、身に戴いていく道こそが濁世に苦悩しながらも、慥かな人生を歩んでいける白道である。

合掌

成田 宣信（金相寺住職）

御同朋の声

【遊行期を生きる】

森 悦子 氏

インドのヒンズー教徒は一生を四季の巡りと意識して、それぞれの季節にふさわしい生き方を志向する。春は勉学に励むがくしゅうき学生期。夏は懸命に働き家族を築くかじゅうき家住期。秋は一線を退きゆとりを楽しむりんじゆうき林住期。そして冬は安らかな死に備える遊行期ゆぎょうきであるという一節。これは私が愛読しているあるエッセイストの受け売りであります。仏教ではどのような位置づけているのでしょうか。

現代は人生百年時代ともいわれ、私も間もなく八十二歳になり、人生の終末期を迎えて居ります。自分を

振り返ってみても、すこぶる限られた狭い道を苦しみながら辿ってきたように思えるのです。

障害を抱えた息子との五十四年間、多くの人たちに助けられ、励まされ、挫けそうな時も沢山ありましたが、なんとかここまで生きてきました。理解あるパートナーと共に…。

幸い二人共、今のところ足や膝が痛い程度で、病気で苦しむことが少なく幸いと思っております。老いは充分に感じては居りますが、人のお役に立てることが出来ていないという後悔は大きく感じています。

何年か前より金相寺副住職様のお導きで、お檀家の方々との勉強会（同朋会）に参加していますが、これが難行で、ちっとも理解出来ず苦しんでいる始末です。それでも『正信偈』、『歎異抄』と、少しずつ教わりながら、根本的には理解できないながらも、なんとなく心の中が有難い方向へ向かっているような気持ちです。

もう少し教わりながら、この遊行期のなんたるかを理解できたらと思ふ今日この頃であります。



同朋会便り

く 歎異抄勉強会 く

【現代語訳】

《 第十三条 (前編) 》

人間の思慮を超えた阿弥陀の本願が「悪人を救う教え」であるからといって、悪を犯すことを恐れないのは「本願ばかり」であり、「阿弥陀の浄土へ往生することができない」ということについて。この主張は、阿弥陀の本願への疑いであり、善悪の行為が人間の思いを超えた契機に促されていることを理解していないのである。

善い行いをしようという思いも、善を促す無数の背景や条件から起こってくるものであり、悪い行いがここらに浮かぶのも、思いを超えた無数の背景や条件がそうさせるのである。いまは亡き親鸞聖人は、「兎や羊の毛の先にあるような小さい罪を犯すのも、すべて思いを超えた無限の因縁が背景にあると感知すべきである」とおおせられた。

人間は固定観念と先入観の生き物

ですから「宿業」という言葉を聞いただけで、毛嫌にするひともいます。

く中略く「宿業」を運命論として受け止めれば重苦しい業の鎖でがんじがらめにされたイメージをもってしま

まいます。しかし、ここでいわれる「いま、ここに、私としてあること」

をちゃんと受け止めましたという安心感の表現なのです。自分が自分に

まで成ってきたいのちの連鎖をイメージしてみれば、いま、ここに、自分としてあることは、まさに不可思議

とししか言えません。これを不可思議と感じられないのは、「自分があ

ること」を当たり前のこととして感じているからです。く中略く

「当たり前前」という感覚が翻され、この不可思議感に圧倒されたとき、

いま、ここに、自分としてあることの豊かさと安定感がやってきます。

(『なぜ?からはじまる歎異抄』

本文より抜粋)

く 所感 く

「宿業」と「運命論」の違いは一

見似ているようで、我が身のいた

き方において全く違います。そこ

には主体的に自分自身の存在をいた

いていくことができているのかど

かという大事な問題があるからです。それはまた、「いま、ここに、自分としてあること」の尊さに本当に気付くことができているのかどうかとい

う問題でもあります。

つつい私たちは、日々の生活を「当たり前」に過ごしてしまいます。

仏教ではこの「当たり前」に時を過

ごす私たちの在り方を「空過の生(空しく過ごす生)」と教えます。そのよ

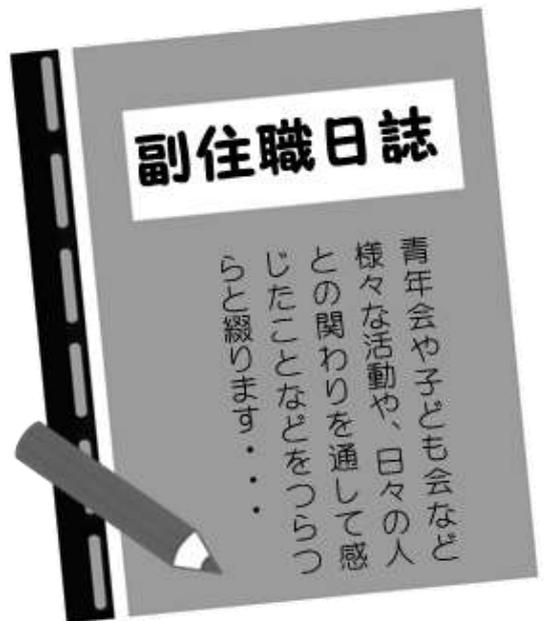
うな私たちに、我が身の存在がいかに不可思議なこと、有難いことかを

教え導いてくださっているのがお念仏の御教なのです。その御教を自ら

の依りどころとして生きること、

空しく過ごしていた一瞬一瞬がとも尊いものになるのではないですよ

うか。



『裏側への想像力』

先日、千葉県で小学校四年生の女の子が父親に虐待されたすえ、殺害されるとい痛ましい事件が起きました。また、この事件に際し児童相談所の対応が非常に問題であったことがわかり、マスコミやマスメディアでも大きな問題として取り上げられ、世間の関心も高まっています。なぜ、そのお子さんのSOSにしっかりと応えてあげられなかったのか。そもそもなぜいのちを奪われなければ

ばならなかったのか。様々な疑問とやりきれなさが募ります。

ただ、今回の事件でもう一つ気になるのはインターネットをはじめとした情報化社会の恐ろしさです。事件の表面だけを伝えられるままに見て、信じ、顔の見えないところで他者を猛烈に批判する。その有り様はある種、狂気的であるとさえ思えてしまいます。

私は現在、息子たちが通う小学校のPTA会長を務めています。何事も関わってみて初めて見えてくる世界というものがありますが、現在の学校教育現場の過酷さは想像を絶します。またそのなかで先生方のご苦労、ご負担は限界を超え、心身ともに参ってしまい、出てこられなくなってしまう先生も少なくありません。そんな現状であるからこそ、しっかりとその現実を見て、考え、いま自分にできることを精一杯やらせていただく責任が保護者にはあると思っています。

今回の事件についても同じではないでしょうか。もちろん、どのような事情があったにせよ、今回の対応はあつてはならない、許されないことだと思います。しかし、ただ無責任に、自己保身のためだけにとられた対応だったのでしょうか。関係者が辞めれば済むような問題なのでしょうか。何よりも、第三者が寄つてたかつて抹殺するかのようにならぬ無責任に批判する在り方は許されるのでしょうか。むしろそのような在り方が本来の問題をより一層見えなくさせているのではないかとさえ思えます。

大事なことは表に見えていることだけでなく、むしろその裏、その背景ではないかと思うのです。事件が起こってしまった背景に思いを寄せる。そんな想像力を養っていくことが、今のこの情報化社会を生きる私たち一人ひとりに求められているのではないかと感じていきます。

てらこや日誌



● 青年会・子ども会合同開催 報恩講の報告

昨年十二月二日、創志館く相模原
てらこやく青年会・子ども会合同の
報恩講をお勤めました。

今回は、子どもたちとの関わり方
について、スタッフ一人ひとりの学
びの場にするという意味も含めて、
相模原市民活動サポートセンターの
大谷さとほさんをお招きし、参加者
全員で関係性を深めるようなゲーム
などを実演していただきました。



実演をしてくださっている
大谷さとほさん

日頃から、地域のなかで青少年の
居場所づくりという目的をもって活
動している我々ですが、改めて子ど

もたちと関わることの難しさや、重
要性、必要性などを学ばせていただ
くことができた貴重な場となりました。
個人的にも長いこと青少年育成
に携わらせていただいています、
改めて様々なご提言をいただくこと
ができ、身の引き締まる思いがしま
した。



子どもだけでなく、手伝いに来てくださっ
た桜美林大学の学生さんや、保護者、スタ
ッフも一緒になってゲームを楽しみました♪

次回の子ども会は四月一日に「花
まつり」の開催を予定しています。
是非有縁の方々お誘いあわせの上、
お気軽にご参加下さい。

今後の予定

法要

三月二十一日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十三日 秋彼岸会
十一月十日 報恩講

勉強会など

四月一日 午前十時〜

子ども会花まつり

※詳細はホームページをご覧ください

四月六日 午後二時〜

同朋会（歎異抄を学ぶ会）

※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の

第一土曜日に開催予定

毎月一回 仏教青年会

※毎月の開催日等、詳細はホームページを

ご確認ください。電話・メールにてお問

合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

ある日の夕食での出来事。小学校三年生になる三男が突然、「人は年を取れば取るほど、時間の流れが早く感じるんでしょう。それってなんでかわかる？」と聞いてきました。応えに困っているのがわかったので「しょうか、こちらの応えを待たずに「それはね、毎日起こることが「当たり前」に感じられるようになってしまっ、トキメキがなくなるからなんだって」というのです。すると、さすがお祖父ちゃん。それに対して、「お祖父ちゃんは毎日親鸞聖人のみ教えを聞かせていたから、そんなことはないよ」というのです。そんな祖父と孫のやり取りにともてドキッとさせられました。私はどうでしょうか？口癖のように「忙しい、忙しい」と口にしながら、あっという間に日々を過ごしてしまっています。ああ、なんと情けないことか・・・と思いつつも、気づけばまた忙しいとつい口走りながらこの寺報の原稿を書いている私です・・・。

『遇くぐうく』第十六号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

Tel 042-778-2879 Fax 042-711-8257

e-mail info@konsouji.com

URL http://www.konsouji.com

発行日 二〇一九（仏歴二五六二年）年三月一日